

【現代社会研究会 読書会 レジюме】

大塚久雄『社会科学における人間』

(岩波新書 1977年)

担当：飯島 聡

「人間は、その生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意志から独立した諸関係を、つまりかれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係を、とりむすぶ。この生産諸関係の総体は社会の経済的機構を形づくっており、これが現実の土台となつて、そのうえに、法律、政治的上部構造がそびえたち、また一定の社会的意識諸形態は、この現実の土台に対応している。物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的生活諸過程一般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなくて、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定するのである。」(マルクス『経済学批判』序言より)

⇒「上部構造」と「下部構造」の関係

序論

【現代社会科学と人間論】

- ・本書の問題意識
- ・「社会科学における理論的思考、つまり社会科学的理論を構成して、それによって社会現象を整理し把握していこうとする、理論的思考のなかで、人間がどういうふう位置づけられ、関連づけられ、そしてどのように取り扱われているか、大ざっぱに言うと、「社会科学における人間」というのは、そういう問題なんです。」(P3)
- ・社会科学の諸理論(主に経済学)では「途上国の問題は割り切れない。ところで、そういう割り切れないところが残るといのは、およそ社会科学の理論が成立するための前提条件というか、そうした根本的な人間の行動様式が違っているという点に問題があるのではないか。さらに、進んでは、人間の行動様式に独自の方向を与える価値体系、さらにその底にある人間観や宗教の違いなどに問題があるのではないか。」(P7)
- ・「人間類型」(Menschentypus) ← ズンバルト
- ・「エートス」(Ethos) ← マックス・ウェーバー

※【参考文献 ①】

M・ウェーバー『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』(岩波文庫) ⇒ 別紙参照

【人間類型とは何か】

- ・「ある時代のある国民が全体として特徴的に示す思考と行動の様式、そのタイプ」(P13)
- ・「例外的な人間はいくらもいるんですが、全体として見たとき、ある特徴的な思考と行動の様式を共通にしている人々がそのなかの決定的な部分を占めている」もの。(P13)
- ・「そうした人間類型は確かに集団全体を特徴づけるものですが、しかし具体的には、さまざまな個人的変容を含みながらも、その集団を構成している個人ひとりひとりの内部にいわばサナギ化した形で抱かれている。しかも、ただ観念のなかに止まっているだけではなくて、おのずから外化し、社会的に形をとって現われてくる。そういうふうには血となり肉となって、個人個人の内部に抱かれつつ、変容されまた伝播されていく、いわば思想的なサナギ、そういう観念的・物質的な凝縮物の独自の類型、これこそが人間類型というものだ」。(P17-18)

I 「ロビンソン物語」に見られる人間類型

【「ロビンソン物語」の社会的背景】

- ・デフォウ『ロビンソン・クルーソー漂流記』で描かれた「人間類型」とは。
⇒「当時のイギリスで、広く農村地域に住み、そしてさまざまな工業生産、とりわけ毛織物製造を営んでいた中小の生産者たち、私はそれを『中産的生産者層』とよぶことにしていますが、そういう人々の生産様式」。(P24)
- ・イギリスにおける小エンクロージャーの歴史や外観。
- ・「アーバン・エクソダス」・「都市からの人口流出」
- ・デフォウのころになると、「農村工業地帯のまったなかから新しい近代的工業都市が、まさしく農村工業の凝(こ)集点として、生まれつつあった。」(P33)
- ・「そうした背景のもとで、各地の農村工業地帯には無数の小エンクロージャーが作られ、それを足場として、さまざまな工業生産者たちが、といっても、そのなかには大小のマニュファクチャー経営者たちや単なる下請の小生産者たち、賃銀労働者たちまでも含まれていましたが、そうした工業生産に携わるさまざまな人々が日々の営みを続けていたのです。」(P33-34)
- ・「中流の身分の人々の生活が世の中でいちばん幸福なんだ」という自己意識 (P35)
- ・「中産敵生産者層に見られる経営的資質」／「醒めた合理的な行動様式」

【ロビンソンの行動様式】

- ・「ロビンソンのなかには近代の合理的な産業経営を可能にするような経営者と労働者、そういう二つの資質が一つに結びついて共存している。」(P45)
- ・「目的合理性」(マックス・ウェーバー)
⇒「目的と手段の関係をささえ、したがって手段の選択にあたっての確な拠り所となるような因果関

係が正確にかつ明晰にとらえられていること」(P 46)

「形式合理性」(マックス・ウェーバー)

⇒「単なる目的合理性に止まらない、さらにさまざまな事象を数理的に、できるならば数学的にとらえていこうとする、そういう合理性」(P 47)

⇒「事業を数理的にとらえることによって、的確な予測を可能にし、さらにまた目的合理的に対象に働きかけて目的を実現するための能力と効率を著しく高めるという結果を生みます」(P 47)

・たとえば、企業簿記(合理的な簿記)、近代の法論理、科学・技術的な思考。バランス・シート(貸借対照表)、損益計算、原価計算など。

・「彼の思考と行動は、形式合理性という特徴を著しくおびている限りにおいて、・・・呪術的な非合理性から解放されていたわけです。」(P 49)

・「孤島のロビンソンにとっていちばん大切に思われたものは、金儲けなどではなくて、人間らしい生活をしていくために必要な財貨をできるだけ効率よく生産すること、つまり経営だったということだったのです。」(P 56)

・「現実の中産の生産者層の決定的部分をなす人々は、さまざまな個人的夾雑物の付加されたロビンソンだった」。(P 59)

・「ロビンソンの人間類型」⇔「冒険商人の人間類型」

【ロビンソンの人間類型のもつ歴史的意味】

・「資金の産業への投下が自生的に社会的な動向とまでになるためには、どうしてもロビンソンの人間類型が社会的な規模において確立されていなければならないわけです。」(P 61)

・「ロビンソンの人間類型は近代イギリスにおいて、まずマニュファクチャーを土台とした初期の資本主義を生みだし、ついで、1688年の名誉革命を画期とする政治的変革、つまり産業国家の成立を介して近代的な産業経営の利害を全面的に掩(おう)護する重商主義政策を実施させ、ついに、1760年代以降の産業革命では、産業経営の形態をマニュファクチャーから機械を根幹とする工場制度へと押し進めて、資本主義の社会体制を確立させた。つまり、歴史上資本主義の自生的な発展を終始押し進めるといふ意義をもった。」(P 63)

・「経済学の理論は、どこまで意識的であるかは別として、実はロビンソンの人間類型を前提として成立している、と言ってよいように思います。前史と言いますか、経済学がまだ十分に成立していないころの、たとえばデフォウとか、ベンジャミン・フランクリンのばあいをとりますと、それはむしろ明白です。アダム・スミスとなると、あの独自の倫理学説がまわりついているので、それほど透明ではありませんが、やはりそう考えてよいように思います。マルクスも、経済理論を取り扱っている限りにおいて、やはりロビンソンの人間類型を前提にしている」。(P 64-65)

・ロビンソンの人間類型のいわばなれの果てとしての「経済人」(ホモ・エコノミクス)という人間的類型。

・「カーストの世界に生きるインドの人間類型」を前提としていたら、自生的な産業革命も経済学の理論も生まれなかった?

II マルクスの経済学における人間

【『資本論』に現われる人間】

・「じっさい経済現象というものは、一見するところ、むしろ物の動きです。そして、人間はさまざまな物の動きの背後に隠れているように思われます。経済現象はさまざまな物の社会的な動きであり、物と物とが取り結ぶ社会関係であるようにさえ見えます。」(P 73)

⇒物価、利子、労賃、地代、需要と供給の動き

・「マルクスは『資本論』の叙述を開始するに先立って、経済現象に見られるこの矛盾した現象、つまり、経済現象は人間諸個人の活動とその成果であるにもかかわらず、どうしてもわれわれの目には物が動き、物と物とが社会関係を取り結んでいるかのように見えること、そして、生きた人間はその背後に退いてしまっていること、そういう事実をはっきり認め、なぜそうなるのか、それはどういう意味をもつのか、ということを実はすでに予め解明していたわけです。」(P 74)

・マルクスの分析方法 ⇒ 「下向過程」と「上向過程」

・いちど「商品とか価値というもっとも抽象的なレベルまで下降したあと、こんどはそこから逆に登り詰め、現実を理論的に再構成していく過程、つまり、この上向過程こそが実は経済学であり、その諸理論が展開されていく姿なんだ、とマルクスは言うんです。」(P 76)

・「人間は生身の姿ではなく、なんらか抽象化され類型化された物質的利害の担い手という姿でだけ現われてき、それ以外の姿では現れてこない。」(P 78)

※【参考文献 ②】

K・マルクス『経済学批判序説』(マルクス『経済学批判』[岩波文庫]所収) ⇒別紙参照

※【参考文献 ③】

K・マルクス『資本論』第一巻第一版序文(筑摩書房) ⇒ 別紙参照

【自然発生的分業】

・「人間諸個人の活動とその活動によって作り出されたもの〔経済現象など〕が、人間諸個人の活動とそれによって作り出されたものであるにもかかわらず、当の主体である人間諸個人にとって、よそよそしい無関係なものとなり、まるで自然と同じように、われわれ人間諸個人の意志からは独立した客観的過程と化している」。(P 83)

⇒「疎外」(Entfremdung) / 「物化」(Verdingung)

／「物象化」(Versachlichung)

・群集のたとえ ⇒ 「すべてそれを構成する個々人の意図とはまったく無関係に動いていく。」

= 「自然史的過程」(マルクス)

・人々は経済現象を「自然現象のばあいと同様に、さまざまに調査し研究して、その法則性を探し求め

る。そして、それによって経済現象を可能な限り支配し、操作しようようにしようとする。経済学というのはそういう営みなの」である。(P 87)

・「マルクスは、経済現象が物象化の結果、「自然現象と同様人間の意識と行動から独立した自然史的過程という姿をとっているために、それを研究対象とする経済学（さしあたって『資本論』も含めて）は、かえって、自然科学と同一の理論的方法をとることができ、また、それによって厳密な意味での科学となりえると考えたのです、」(P 89)

・「物神性」(F e t i s c h c h a r a k t e r)

= 「人間はその自分の手で作ったものを、逆に、自分たちの造り主で、超現実的な力をもって自分たちを支配しているものと考え、偶像を拝む行為」。たとえば、商品を偶像として拝む行為など。

・「物象化現象が生起する結果、物がひとりで動き、お互いに社会的関係を取り結ぶかのように見え、また、本来人間と人間の関係の投影にすぎないような価値の実体も、なにか対象的性格をもつものとして商品に内在しているように見えてくる。」(P 92)

・「価格というものが人間の思惑をこえてひとりで動いている。しかも、ひとたび大崩落がくると、財産というものがたちまちその対象性を失って、それこそ幽霊のように跡形なく消えさってしまうではありませんか。」(P 92-93)

・「経済学とは違って『資本論』では、まだ観念の世界のなかだけのことですが、人間諸個人を物象化された状態から一步一步救い出す、あるいは、彼らから疎外のペールを一枚ずつ取り去ってその真の姿を示す、そういうことをやっているわけです。ここがいわゆる経済学とは違う。」(P 95)

・既存の経済学への批判としての『資本論』

※【参考文献 ④】

マルクス／エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』（廣松渉訳 岩波文庫）⇒ 別紙参照

※【参考文献 ⑤】

マルクス『資本論』（筑摩書店）

第一巻第一章第四節「商品の物神性（フェティシユ的性格）とその秘密」⇒ 別紙参照

【「ロビンソン物語」に対するマルクスの評価】

・「歴史上資本主義社会だけは、発達した自然発生的分業を土台とする高度の商品経済の上に立っているために、経済現象が逆立ちした、幻想的な姿をとって現われる。けれども、その奥底にある真実の姿は資源配分にほかならない。したがって、学問的な批判の目をもって見れば、歴史上に現れてくる他のさまざまな社会的諸形態の経済のばあいとまったく同じことなのだ。経済という人間の営みを貫く根本的事実は、世界史のあらゆる局面を通じて、すべてつねにほかならぬ資源配分の問題であって、ただ、発展段階の相違に応じて、原理を異にする社会的形態をとるだけのことだ。」(P 101)

・「少なくとも、経済学の範囲内で論じている限り、マルクスもまた「ロビンソン的人間類型」を認識のモデルとして前提していた、と。あるいは、マルクスは「ロビンソン的人間類型」がおおよそ経済学における理論形成の前提となっている、と考えていた。」(P 102)

【マルクスに見られる人間類型論の萌芽】

・「資本主義以外の社会諸形態の経済現象をささえている人間類型もまたロビンソンのものなのか。あるいは、「ロビンソンの人間類型」は、世界史を貫通して、すべての時代の人間諸個人の思考と行動を代表していると考えてよいのか。そうした問いに彼が肯定的に答えるとは、ちょっと考えられません。もし、考えられないとしますと、マルクスは、世界史の上にただ一つ「ロビンソンの人間類型」だけではなく、そのほかにもさまざまな人間類型が存在する、としていたことになるでしょう。」(P 105)

・「問題は、こうしたインド村落内部における社会的分業関係、だから、村落共同体そのものの再構築が、自然法則にしたがうかのように、侵すべからざる必然性をもって遂行される、とマルクスが言っていることです。・・・そうだとすると、インドの村民たちは「ロビンソンの人間類型」に属するイギリス人とは違って、決してマニュファクチャーやブルジョア社会を作り出ししたりしないで、たえずあおの特有な村落共同体とカースト制度を作り出していく。つまり、どんなばあいにも、あるいはかりに新大陸のどこかに集団移住させられたとしても、同じような村落社会を作り出していく、ということになる。」(P 108-109)

「もしも「ロビンソンの人間類型」ではなくて「インド村落民的人間類型」の行動様式を認識のモデルとして前提したとすれば、おおよそ経済学の理論などといったものはどうてい生まれまいだろう」。(P 109)

・「厳密な意味では、マルクスの学問には、人間論は立派にあっても、人間類型論はなかった。」(P 110)

・「マルクスにはたかだか人間類型論、つまり、人間論の相対化の萌芽が見られたにすぎない」(P 111)

※【参考文献 ⑥】

K・マルクス『資本論』(筑摩書房)

第一卷第十二章第四節「マニュファクチャー内部の分業と社会内部の分業」 ⇒ 別紙参照

【以上】